初期仏教研究の回顧

櫻部　建

思いがけないことになりまして、大変晴れがましい場に引き出されて、少し戸惑っております。

始めは、昔私の教室にいた人々が集まるから、そこで何か話して欲しいということでしたので、気楽に引受けまして、この題目も、自分がやって来たことの思い出話でも話そうという、そんな気持ちでお返事致しました。ところが、休みが終りまして大学にやって来ましたら正門に「記念講演」という大きな看板が出ておりまして、それでびっくり仰天し、あわてて考え直しまして、ようやく今朝になって、こんなことでも話してみようという腹案が出来たような次第でございます。

このような機会をわざわざ作って下さいましたことは、皆さんの御好意であると、ありがたく思っております。それに値いするようなことは、して来てもおりませんし、また今日も、皆さんのお彼に立つようなことが申し上げられるかどうか、まことに心許ないのであります。

還暦などということは、近頃ではあまり流行らないと思うのですけれど、そう言われれば自分も歳をとったものだと感じますし、まあ、もうあまりお役に立たないようになったと自覚せよということであろうと、思っておるのであります。

それでは、しばらくお耳を拝借致します。

個人的な思い出話だけでは申し訳ないと思いまして、左のように考えました。――「初期仏教研究の回顧」といっても、私自身が初期仏教について長く勉強させてもらったのだから、ともかく私個人の思い出についてお話ししよう、というのが、さっきも申しましたように、最初に思ったことでございますが、それでは済まないだろうということになりますれば、もう少し拡大して、（大谷大学は初期仏教研究の分野で輝かしい研究業績をあげた歴史を持っておりますから）大谷大学における初期仏教の研究について回顧するということが出来ようかと思います。さらに、その範囲をもう少し拡げれば、日本における初期仏教研究、（勿論それは明治中期以降に始まったことですので）明治中期以降今日までの日本の初期仏教研究の歴史を回顧して、それについて申し上げることも出来ようかと思います。さらに、もう一つ拡大すれば、日本と限らないで、世界の仏教研究の流れの中で、初期仏教についてはどのような研究がなされて来たか、その歴史について、申し上げることも出来ようかと思うのであります。

ですが、本日そのような色々な話を一緒にして申し上げるという訳にも行かず、また、別々に四通り申し上げるというようなことも煩らわしうございますから、一番大きい、世界においての初期仏教研究の歴史につきましては、興味のある方はこういうようなものをお読みになればよい、ということだけをまず申し上げておこうと思います。

これには大変良い本がございます。世界において、初期仏教の研究と言いますれば、ほとんどがパーリ仏教研究に尽きておると言ってもよいと思いますが、このパーリ仏教研究は、今日から百年以上前にヨーロッパにおいて始まったのでありまして、そのヨーロッパにおけるパーリ仏教研究の歴史、それも初期の歴史を知るために、渡辺海旭師の『欧米の仏教』という書物がございます。これは、大正七年に刊行されたものですが、その後多少増補されまして、後に師がお亡くなりになってからその遺稿を集めて壺月全集というのが昭和八年に出されました時に、その上巻の中

に丸々収録されております。

これは、大正十年位までのヨーロッパにおける仏教研究のすべてに亘って、非常に巧みに叙述されたものでありまして、初期仏教の研究に限られてはいないのですが、特にパーリ仏教・パーリ仏典研究について多くの筆が費やされております。ヨーロッパに於いてパーリ仏教の研究が始まって少したった頃、Viggo Fausböll とか、V. Trenckner とか、Hermann Oldenberg とか T. W. Rhys Davis とかいった秀れた学者が輩出した初期のパーリ研究の時代というのは、今日思ってみましても、何か胸がワクワクさせられるような、非常に高揚した雰囲気の中で、研究が推進されて行った時代であったように思いますが、それをまた渡辺海旭先生が、独特な麗筆で描いておられまして、読んで楽しい記述になっております。もしもまだお目に触れておらなかったら、是非お読みになることをおすすめいたします。

この書物から以後は、一冊読んで初期仏教の研究の歴史が分るというような良い書物はありませんけれども、一九四八年にコペンハーゲンで出された A Critical Pāli Dictionary 第一巻の附篇 (Epilegomena) は、パーリ語文献の校刊・翻訳・研究についての細密なビブリオグラフィであります。また、日本では、戦後しばらくして水野弘元博士の『パーリ語文法』が出ました。この文法書の附録に、「パーリ語及びパーリ仏教の歴史」という文章が加えられております。これは、水野先生のお人柄か、淡々と正確に事実だけを述べていらっしゃいますけれど、それだけに、たいへん分り易く手軽にパリ研究の歴史が分ります。ヨーロッパだけでなくて、アジアの他の国々、それから日本のパーリ研究についても書かれております。この書物は昭和三十年に出ましたが、書かれておることは、だいたい戦争前までのことであります。

それより前、昭和二十九年に山口益先生の『フランス仏教学の五十年』というものが出ていますが、その中に「最近十一年間のヨーロッパの仏教研究の現状」という文章があり、それは勿論、初期仏教研究だけについての報告では

ありませんが、戦中および戦争直後の彼地における初期仏教研究のことはそれで大分分ります。また、昭和三十年に出た中村元博士の『今の世界と東洋思想』という書の中にも新しい研究についていくぶん書かれてありますし、昭和三十四年に出された山田龍城博士の『梵語仏典の諸文献』の第Ⅱ章には、初期仏教に関する梵文資料とその研究について、くわしい情報が盛られています。またしばらく年がたって、昭和五十年にドゥ・ヨング博士が日本へ来て講演され、それをもとにした翻訳書『仏教研究の歴史』が理想社から出版されました。そこに初期仏教研究の最近の業績についての言及があります。これは近頃出たものでありますので、皆さんほとんど御承知でしょう。

このようなものをご覧になれば、そしてさらに熱心なお方は戦前から戦後にかけて続刊された Bibliographie bouddhique などをご覧下されば、だいたいパーリ研究がヨーロッパで始まって以来、今日までの歴史は、ほぼお分りになると思います。そしてさらに、ごく最近のことについては、ドゥ・ヨングさんがその後もう一度日本へ来られまして、(確かこの大学のこの部屋でだったと思いますけれども)ヨーロッパの仏教研究の現状について、講演をなさったものがあるのは、御承知のとおりでございます。まあ、どうぞそれらを御覧下さいとお願いして、世界全体の初期仏教研究の歴史を辿ることは割愛しておこうと思います。

それから、日本における研究の歴史でございますが、これを私は、本日の話の後半に申し上げようと思います。で、前半には私が最初考えておりました、自分の勉強した思い出話を申し上げます。その話の中で、自然、大谷大学の初期仏教研究の業績について触れることになりますから、私自身の思い出と大谷大学に於ける初期仏教研究の回顧とを兼ねて、前半にそれを申し上げます。そうして後半には、日本の全体の初期仏教研究について申し上げようと、こんな風に思っておるのでございます。

只今司会の方から紹介がありましたように、私は、昭和二十二年十月にこの大谷大学の文学部を卒業致しましたが、予科へ入学しましたのは昭和十七年の四月でございます。私の数え歳十八歳の年。昭和十六年十二月に戦争が始まっ

たその直後のことでございます。その頃は勿論旧制でございますから、予科が三年。それから本科、それを学部と申しておりましたが、学部が三年。合わせて六年の課程でございました。けれども戦争で、そんなにのんびり勉強させてはおけんということで、予科の課程が二年半に縮まったのでございます。その最初の二年間は、それでもまあどうやら勉強できたんでございますが、三年生は、期間が半年に縮まった上に軍需工場へ動員されて働いたり致しましたので、ほとんど全く勉強できませんでした。で、事実上予科の課程は二年ほどしか修めておらない訳でございます。

ところで、その予科三年間の課程に、大谷大学では、他の学校にない仏典基礎学という授業が課せられておりました。仏典基礎学甲と仏典基礎学乙とがございまして、甲というのは今日の真宗学の入門講義に当り、乙というのは、仏教学の入門講義に当ります。その仏典基礎学乙の、予科一年生の私が受けました授業を担当なさったのは、龍山章真教授でした。色の白い女の様な方でありましたけれども、語学の才能に恵まれた俊秀でした。戦争中に体を悪くなさって、戦後間もなく四十歳代の初めという壮年でお亡くなりになった方であります。『印度仏教史』『南方仏教の様態』『梵文和訳十地経』などの著作があります。この仏典基礎学乙には教科書がございました。『印度仏教概説』という書物でしたが、それが上・下二巻に分かれておりまして、『印度仏教概説　上』を一年生で、『下』を二年生で習い、三年生では『仏教諸宗概説』という教科書になります。その三冊を三年間で勉強する定めでした。『印度仏教概説　上』で、今日で申す原始仏教・部派仏教の領域が、二年生で習う『下』ではインドの大乗仏教が、それから三年生で習う『仏教諸宗概説』では中国・日本の仏教が、それぞれ勉強出来るという風になっておりました。

先程も申しましたように、私は三年生を事実上ほとんどやっておらないので、『仏教諸宗概説』は全然習いませんでした。一年生で『印度仏教概説　上』を龍山教授に、二年生で『下』を西尾京雄教授に習ったのであります。田舎の中学校を出まして京都に来て、色々な新しい知識の門が開かれたように思え、うれしかったことを覚えております。

この教科書は、今思っても良く出来ておりました。戦後学制も変わりまして、使われなくなりましたけれども、今

日でもなお、多少の加筆と修正をすれば、立派に教科書として通用する良い書物だったと思います。上巻は龍山先生自身が執筆されておりましたし、下巻も西尾先生の執筆だったと思います。

その龍山・西尾両先生の師にあたるのが（私が入った時には既に亡くなっておられましたけれど）赤沼智善教授であります。赤沼先生がおられたればこそこの大学に原始仏教学科というものが出来た、と言っても過言ではありません。今日は仏教学科一つでございますが、私が入学しました頃はそれが二つに分かれておりまして、原始仏教学科と大乗仏教学科と申しました。その原始仏教学科の創設者として、そしてまた日本の原始仏教研究の草分けの一人として、赤沼先生の業績の偉大さは今さら申し上げる必要もありません。赤沼目録（漢巴四部阿含互照録）・赤沼辞典（印度仏教固有名詞辞典）の名を挙げるだけでも、充分にお分りいただけると思います。

今、教科書のことを申しましたが、実は赤沼先生自身が予科の仏典基礎学の教室で使う為に教科書を書いていらっしゃいます。それがまたとんでもないものでありまして、『阿含の仏教』という標題のすばらしい豪華版の教科書でございました。それが使われたのは、私らよりずっと前です。つい先日亡くなられました藤島達朗教授がよく「わしらは、あれで勉強したんだ」と言っておられました。藤島教授が予科に御入学になったのは大正の末期であろうと思います。その頃使われたのであります。それは、大谷大学が新しい大学令による私立大学として発足したばかりで、佐々木月樵学長のもとで、新たな仏教研究をスタートさせようとする意気に燃えておった頃であります。だいたい、新しい制度の予科に、仏典基礎学という名前の学課を課するということは、佐々木学長が主張されたところだそうで、その佐々木先生の意気に感じた赤沼先生が、当時の先生の全力を傾けてこの教科書をお書きになったのだと思います。

『阿含の仏教』というのは、背が皮でありまして、天金というのですか、上方の小口に金が塗ってあって、教科書としてはまあ何とも贅沢なものでした。その教科書が何年使われたのか知らないんですが、多分昭和の初年にこの大学の中で騒動が起きまして教授方が連袂辞職なすったということがございましたが、その時赤沼先生も辞表を出して

故郷へお帰りになりましたので、どうもその時から使われなくなったんじゃないかと思うのです。これは教科書としてはちょっと破格ですけれども、内容は大変優れたものであります。文章は文語体で書いてございます。ですから、若い方には多少馴染みにくいかも知れませんけれども、内容は実に簡潔で分りやすい、まことに良い書物でございます。私蔵の『阿含の仏教』は、亡父から譲られましたもので、今も大事にしております。まあ、あれが今さら再版されることはないでしょうけれど、多くの皆さんの目に触れないのは残念だと思っております。図書館でなりと是非一度お繙きなさるようにとお奨めいたします。

さて、龍山先生に原始仏教を習い、西尾先生にインドの大乗仏教を習いましたが、やがて戦争が激しくなって工場へやられ、工場から軍隊へ行ってしまいましたので、仏典基礎学という授業は私にとっては、それで終りになりました。そして、兵隊に行っておりまして学校に全然出ていないのに、休学にもならないで自動的に進級してしまったので――それが当時のおかしな制度でして、兵隊に行っておる者はお国の為に働いているのだから留年にはしないということだったのかどうか知りませんが――昭和二十年十二月、兵隊から帰って来てみたら、いつの間にかちゃんと予科は卒業して学部に入学しておりました。しかも、先程申しましたように予科が半年縮められたせいで、昭和十九年十月にその身は軍隊にいたのに学部の一回生になり、二十年九月に一回生を終了して、十月から二回生に進んでおりました。ですから復学の手続きをしましたら、もうお前は文学部の二回生だと言われて、びっくりしたことを覚えております。

ところで、身分は学部の二回生でも専攻さえ決まっていない。専攻を決めなくちゃならない。それで、先程申しました原始仏教学科と大乗仏教学科と二つあった中で、原始仏教学科を選んだのであります。何故かといわれましても、今思ってみますとそれほどしっかりした理由は無かったのですが、唯何となく仏教を一番基礎から勉強したい、一番源から勉強したいという気持ちがあったように思います。それで原始仏教学科に入ろうということになりました。

当時原始仏教学科は主任教授が欠員で、助教授が舟橋一哉先生でした。今と違って教授と助教授の差は厳然としておりましたので、教授が欠けて助教授しかいない原始仏教学科では、舟橋先生が指導学生を持つことはできません。大乗仏教学科の山口益教授が、原始仏教学科の学生の指導教授を兼ねておられ、私は山口先生の教室に属したのであります。しかし、事実上は舟橋先生にパーリ語の手ほどきをして戴いて勉強をはじめ、一方、山口先生の演習の教室にも出て、Prasannapadā をとぼとぼ読んだのでございます。

卒業論文は、「縁起説の問題」という題で書きました。内容は今申し上げるのもお恥しいのでありますけれども、赤沼先生や舟橋先生が問題にしておられた、一切法因縁生と有情数縁起と、縁起説にその二面があるという問題を扱って何とか論文を作り上げたという気がいたします。

その論文に扱いました縁起説の二面ということは、近頃また問題になりまして、筑波大学の三枝教授と舟橋先生との間に何度か論難往復があったことは皆さん御承知だと思います。この論戦を京都大学の梶山教授が「死に至る病だ」と言っていささか冷やかしておられましたけれど、まあ結果はやや、すれちがいに終ったようであります。私はやはり、舟橋先生の教えをうけたせいもありましょうけれども、縁起説に二面ありとする赤沼先生以来の考え方は、確かに成り立ちうると思うのであります。後の中国仏教で使う言葉を借りれば、一切法因縁生の方は言わば、理としての縁起でありますし、有情数縁起と言われる方は、事の上に見られる縁起と言ったらよいと思うので、そのような二面が区別できることは否定し得ないと思うのであります。

まあ、しかし、私のは随分怪し気な卒業論文で、よくもパスしたものでありますが、当時は何しろ戦後の混乱期でして、インフレ食糧難の中で書いた論文でしたから先生方も大目に見て下さったのだろうと思います。

先程申しました様な事情で私の指導教授は山口益先生でありましたから、卒業論文の主査は山口先生で、副査が舟橋先生でありました。卒業論文の口頭試問の日が予告されまして、おどおどしておったのでありますが、その試問の

予定の三日位前に私が大学へやって来ましたら、舟橋先生が「今日試問をやろう」とおっしゃるんです。学生というのは私一人しかおりませんでしたので、やろうと言われれば嫌とは言えないんで困っておりましたら「山口先生の都合を聞いてみる」と言ってお宅へ電話をかけられました。御都合が悪ければ良いのになあと思っておりましたが、山口先生はよいとおっしゃったらしくて「お宅で試問されるそうだから、一緒に行こう」と舟橋先生はおっしゃるんですね。いやまあ、今ではちょっと考えられないことですけれども、私の試問は大学の中ではなくて、山口先生の書斎で行なわれた訳です。舟橋先生に連れられて山口先生のお宅に参りましたが、その日がまたあいにく雨が降っておりました。兵隊の時の服を着て下駄をはいて、今のように全てが舗装された道路ではありませんでしたから、ぬかるみの中をべちゃべちゃ歩いて、汚れた足で山口先生のお宅のきれいに拭きこんだ所へ上がるのがとても申し訳なかったのを覚えております。それで書斎で受けた両先生からの試問の一つ一つの思い出は今も鮮明でございますが、あまりに個人的なことですので、この位にいたします。

そんなわけで、どうやら卒業したのが昭和二十二年の秋で、九月末日に卒業するはずがどういう訳か遅れて十月一日附になっております。予科・学部六年の過程を五年半で、その五年半のうち兵隊で一年とられ、その前後にかれこれ一年実質的には勉強していない期間がありますから、五年半といっても実は三年半しか勉強しなかったのです。卒業したと言いましてもお恥しいようなことでありました。そこで、当時研究科と呼ばれておりました課程、すなわち今の大学院、に入学させてもらいました。というのも、今申しましたような事情で六年の課程を三年半しか修めていない。全く何もろくに勉強しないで卒業ということになって、卒業証書をもらっても、これではどうにも恥しいという気がしてならなかったので、それでまあ、研究科に席を置かせてもらって、もう少し勉強をしようという、それくらいの気持でした。一生学問の世界に生きることになろうとは夢にも思わなかったのであります。

卒業してからまで親父の脛は齧れまいと思って、女学校の英語の先生をアルバイトでやりながら研究科で勉強する

つもりでした。ところが、アルバイトがいつか本職になって、一年半ほどは勉強もせずに女学校に行って英語を教えておりました。本当に勉強するようになりましたのは、だから、昭和二十五年ぐらいからだったと思います。日本の経済・社会状勢もその頃はようやく安定して来まして、どうやら勉強できるような事情になって来ておったのであります。

当時研究科というのは、実に野放図な制度で、何も必須の規定が無いので、今日の大学院のように単位を履修するなどのことは全く無かったし、勉強したい者は勝手にやれといった制度でありました。女学校で教える傍ら、それでもパーリ語だけはポツポツ読んでおりましたから、女学校を止めて、改めて気合いを入れ直して、パーリ語を勉強しようと思いました。舟橋先生がそれでは Sammoha-vinodani を読もうとおっしゃる。ご存じのようにパーリ・アビダンマの註釈書であります。読み出したんですけど仲々難しくてよく読めない。その上あれはちっとも面白くなくてへこたれておりました。そうしたら、当時図書館に加藤実さんという方が司書をしておられまして、（この加藤さんは、原始仏教学科の卒業生で私の先輩であり、仲々の勉強家でありましたが）この方が舟橋先生に、ヤショーミトラの倶舎論註を読んで頂けませんかとお願いされて、皆が一緒に読むんならやろうということになりました。加藤さんに誘われて、（当時仏教学研究室助手は稲葉正就さん、副手は雲井昭善さんでありましたが）雲井さんと私とが加わり、三人でヤショーミトラ註を読むことになりました。後には高野山から勉強に来ておられた高田仁覚さんも加わられまして、舟橋先生の指導の下に、四人で暫く読んだのであります。それはまことに楽しい時間でありました。

私は、その頃大変片意地で、サンスクリットのものはサンスクリットで読めばよいので、チベット訳の助けを借りるのは不条理なことだと思っておりました。暫く読んでいただいて、夏休みになりました。夏休み中にヤショーミトラの何頁分かを自分で一生懸命訳しまして、できたものを舟橋先生に提出しましたら、先生に「君はやっぱりチベット語をやらなきゃいかんな。チベット訳を見れば、こんな誤訳はしないんだ」とお叱りを受けました。それでチベッ

ト語をやらない訳にはいかないようなことになり、意地をはっていたのが折れて、とうとうチベット語を勉強するようになりました。やがて、チベット語訳とサンスクリット文とを対照して読むということの醍醐味を次第に知るようになりましたが、それは全くヤショーミトラ註によって養われたのであります。

それに因んで、是非申し上げておきたいのは、皆さんの中に御承知でない方も多いと思うのですが、ヤショーミトラ註というものを始めて日本にもたらしたのは、南条文雄先生であります。ヤショーミトラ註のマニュスクリプトはパリのビブリオテーク・ナショナールにありました。南条先生と、まだその頃元気でおられた笠原研寿氏とが、オックスフォードからヨーロッパへ行って——あれは国際東洋学者会議か何かがあって聴講に行かれるんですね——その時に、パリの図書館から多くの仏教写本を借り出して、薄い紙に透き写しをされる。お二人で手分けして写されたらしいですね。随分たいへんな努力であったと思いますけれど、その写された中にヤショーミトラ註があり、やがて南条先生が帰国されてから暫くはそのままになっておったのですけれど、泉芳璟先生が、それを青写真にとって、希望する人に分かたれたこともありました。それは私が入学するよりもずっと前のことですが。——それで、その青写真にとったのを製本したものが研究室にございまして、それを私は時々出しては眺めておりました。実にみごとなデーヴァナーガリーで写してあり、非常に読みやすいものでありました。のちに萩原雲来先生によってヤショーミトラ註がローマ字版で出版された際に、校訂に用いられたN本がそれであります。萩原先生と山口先生と共同の仕事として、その界品・根品が戦前に翻訳され、戦後、第三章世間品が、山口先生と舟橋先生の共同の仕事として、倶舎本論も併わせて和訳され『倶舎論の原典解明』と標題して出版されておることは、皆さん御承知の通りでございます。

加藤さんの希望がきっかけになって、私は初めてヤショーミトラ註にふれ、それから暫くは完全に説一切有部阿毘達磨に引込まれてしまいました。ヤショーミトラ註は、業品の途中から即ち玄奘訳にして巻十四の初めから始めて、賢聖品の終りごろまで読み進んだところで、私はインドへ行くことになりました。昭和三十二年のことです。これは、

長尾雅人先生の御好意があって、そんな運びにさせていただいたのでありますが、昔の那爛陀僧伽藍の遺趾の近くに、名前もナヴァ・ナーランダ・マハーヴィハーラという近代的な仏教研究所がビハール州政府によって建てられておりまして、私は二年間をそこですごしました。

そこで日本語と中国語の講師というポストを与えられ一五〇ルピーの給与をいただいて、傍ら勉強するということでありました。日本語を勉強したいという人もそう多勢ありませんでしたし、自分の好きなことを自由にやっておりまして、その二年間はまことに幸せでございました。研究所長 Satkāri Mukherjee 博士――優れたパンディットでありました――から、「お前は学生が少くて余裕があろうから、別に倶舎論の講義もやれ」と言われまして、あつかましい話でありましたけれど、ろくにしゃべれない英語で倶舎論を学生に講義した訳であります。その研究所には当時のインドの研究所にめずらしく、チベット大蔵経がございまして、尤も、ナルタン版でたいへん読みにくいものでありましたが、それを使って、アビダルマーヴァターラ（『入阿毘達磨論』）を、その注釈と併せて読んだのもこの頃でございます。

そうこうしているうちに、梵文倶舎論の校訂が進んで、もう印刷作業に入っておるということを聞きました。ビハールの州都パトナ（ナーランダ研究所から約八十キロ）に、K. P. Jayaswal Institute というインド史・インド文化の研究所があります。その所長をしておられたのが、A. S. Altekar という考古学者で（その二、三年後には亡くなられましたが）サンスクリットもできる人でした。この Altekar 先生は私に大変好意的にして下さっていた。この研究所から P. Pradhan 氏による倶舎論の校訂テキストが出版される予定で世間品あたりまでの初校刷りがすでにできておったのを、Alteker 博士にたのんで借りて来まして、一生懸命写し取りました。始め半分くらい手で写してから、後はカメラで写真にとりました。仲々うまく撮れなかったんですけれど、それでもなんとか読める程度にはできまして、それを京都に送ったことを覚えております。だから、倶舎論の初めの部分の原文を日本で一番早く手に入れ

た大学は、多分大谷大学だったと思います。当時ナーランダー研究所の教授の一人に N. Tatia というひとがおりました。ジャイナ教徒で、もとよりジャイナのことに詳しいけれども、仏教についても仲々知識を持った人でしたが、この Tatia さんが、一緒に倶舎論を読もうじゃないかと言い出しました。そしたら、ヴィエトナムから留学していた学生で、Tich Ming-chou（釈明珠）という比丘、これも仲々の勉強家で、やはり一緒に読みたいと言う。そこで、Tatia 博士と Ming-chou 比丘が毎日朝早く私の部屋にやって来て、三人で一時間半か二時間ずつやりました。それでだいたい倶舎論の最初の二章を読み終った頃に、日本に帰ることになったのであります。それが後に私の『倶舎論の研究』を纒めるもとになったのであります。

そんなようなことで、それから暫くはずっと倶舎論を中心とした説一切有部の論書ばかりに親しんでおりました。それが初期の大乗仏教の経典にも関心をもつようになりましたのは、いつ頃かしっかり覚えてはおりませんけれど、昭和四十年ぐらいからだったと思います。これには一つの機縁がございました。カルピスの会社の社長でありました三島海雲という方が、仏教の経典を現代語に訳し誰でも読めるような形にして、広く日本の一般の人々に読んでもらいたい、それが為に自分は私費を投じてこの仕事を成しとげたい、ということを発願されまして、山口益先生に相談され、山口先生が現代語訳の仕事を引受けなさいました。先生に関係をもつ人々が何人かお手伝いすることになり、私もそれに加わりました。この結実が後に『仏教聖典』として平楽寺書店から出版されることになるのであります。その内容は阿含及び大乗経典の抜萃の現代語訳というものでありました。その阿含の部を雲井博士が三分の二位私が三分の一位受け持ちました。さらに、大乗経典の部の始めの方、『般若経』その他いくつかの経典（『般舟三昧経』だとか『阿閦仏国経』だとかというもの）を、他にやり手がなかったものだから、私がやるということになってしまいました。それで初期の大乗経典を初めて一生懸命になって読んだのであります。これが、その方面に目を開かれる最初でございました。

一方、龍谷大学に静谷正雄教授がおられまして、私は早くから知遇を得ておったのでありますけれど、私がそのような方面に関心を広げたことを大変喜んで下さいました。で、静谷先生に色々と教えを請うたことを思い出します。

そのころ、平川彰博士が大著『初期大乗仏教の研究』（昭和四三年）の中で、非常に画期的な見解を出されました。一方に静谷さんも、初期の大乗経典について、それを原始大乗・初期大乗の二段階に分けるという新しい見解を提出してらっしゃいます（『初期大乗仏教の成立過程』昭和四九年）。

こうして、初期の大乗経典の研究は、近年、主として平川・静谷のお二人によって大変新たな展望が開かれたように思います。実は、赤沼先生に、夙に、初期の大乗経典についての非常に秀れた見解がありまして、それは先生の『仏教教理の研究』の中に示されております。そこで先生は『般舟三昧経』などの重要性に鋭く着眼してらっしゃいます。そういう点にヨーロッパの学者は、あまり注意した人がなかったようですけれども、最近はぼつぼつその方面に興味を示す方々が出てこられたのは、さっき申された通りであります。

私が本日の話に「初期仏教研究の回顧」という題を出しまして、普通よく使われております「原始仏教」という言葉を使わなかったのは、この言葉がそれぞれの学者によって多少意味を異にして使われていることから混乱を生ずることがあるので、そういう混乱を避けたいということもあったのですけれども、もうひとつには、「初期仏教」という言葉で「初期の大乗経典」をも含めたいつもりがあった訳です。というのは、年代的に言えば初期の大乗経典が出現した時代は、事実、阿毘達磨仏教の時代と大きく重なる訳であります。原始仏教・部派仏教・大乗仏教という三つの時代が順次につながっているような言い方がされますけれども、それは事実に即しないことだとかねがね思っております。初期仏教ということは勿論、阿含の仏教、それから阿毘達磨の仏教を含むのですけれど、それに初期の大乗仏教をも含めて、その全体を注意しなければいけない。大乗と小乗とは――まあ、小乗というような言葉は使わないことにして――大乗と原始・部派仏教とは、何かその間に越え難い壁でもあるように考え、あるいは両者が全く異質

のものであるかのように考えるのは、どうもたいへん時代遅れなことであると思うのであります。その意味も含めて私は、初期仏教という言葉を使ったつもりだったのです。

その点では、日本の学者よりもヨーロッパの学者の方が、大乗・小乗というような差別にこだわりを持たないで素直に見て行かれるので、今私が申したような考え方に立っている人は、かえって多いように思います。先年お亡くなりになりましたベルギーの E. Lamotte 先生がそうでありますし、パーリ学者として特異な活動をしていらっしゃる A. K. Warder さんもそうでありますし、L. Schmidthausen さんのような今気鋭の若い学者もそうであります。むしろその考え方が常識であると思うのです。

日本では、そういうことをあえて文章にした人は少いのですけれども、私が関わった限りで考えて見ますと、中央公論社刊「世界の名著」シリーズの中の第二巻『大乗仏典』（長尾雅人博士編集）の中には、大乗の諸経典、諸論書からの抜粋現代語訳が収められていますけれども、それと併せて「倶舎論」も載せられているのであります。その「倶舎論」の部分は私がお手伝いしたのでありますが「倶舎論」と言えば小乗の論あるいは阿毘達磨の論書であって大乗の論ではないというのは、先程申しました大小乗を峻別する考え方から行けば当然でありますのに、編者長尾博士は躊躇することなしに「倶舎論」を『大乗仏典』という標題の一巻の中にお入れになりました。その巻について長尾先生は長い解説の文章を書いておられますけれども、その中で「倶舎論」は実は大乗の論書ではないんだけれども、これこれの意味で「大乗仏典」の中に入れたのだ、というようなことを一言も書いていらっしゃらない。書いていらっしゃらないということに、私は大変意義があると思うのです。というのは、今さら断る必要もないということでありましょう。そういう形で、大乗と小乗との間の壁を無視してしまわれた。それは注目すべきことだったと思います。

どうも私の思い出話ばかりが長くなって、後半に申し上げようと思っていたことが何も申し上げられなくなりそうですから、思い出話はこれで打ち切りまして、日本の初期仏教研究の回顧ということにつきまして、少しだけ申し添

えようと思います。

日本の初期仏教研究の多くも、ごく最近まで、今言った大乗と小乗——小乗という言葉は適当ではありませんが、便宜上使うとして——を区別、あるいは峻別するという考え方の上で行われていたような気がいたします。これからはそうではなくなるべきであろうと言うのが私の考えであります。何故そう言うかと言いますと、日本では明治中期から初期仏教の研究が——と言っても、ほぼ阿含の研究に尽きておりますが——新しく勃興いたしました。この新しい研究の先頭を切ったのが姉崎正治・椎尾弁匡とか、続いて赤沼・木村・宇井といった方々でありますけれども、その阿含研究勃興の大きな動因になったのは、大乗非仏説に対する反動であろうと思います。私がそう思うだけではなく、宇井先生もそのことを書いていらっしゃいます。『現代仏教講座』というものに、宇井先生が仏教研究の歴史を回顧して書かれた文章の中に、そのことが見えます。

日本は大乗仏教の国で、日本の諸宗は皆大乗経典を所依の経としている。その大乗経典が仏説でないという考え方が知られた時の日本の仏教知識人のショックは今日我々が想像するよりも、はるかに大きなものであったので、そのショックから生じた反動のひとつが、阿含研究の勃興であります。つまり、大乗経典が仏陀の教えそのものでないならば、まさしく仏陀の教えといえるものはどこにあるか、それは阿含に見い出されるはずではないか、ということで、姉崎博士の『根本仏教』や、『現身仏と法身仏』、いずれもたいへん名著でありますけれども、それらを読むと、そういう考え方が随所に出てまいります。仏陀金口の説は何かということが、当時の学者にとって大きな関心であったということが良く分ります。それより前は、中国以来の教相判釈——主として天台大師の教相判釈——の影響が非常に強くて、阿含経典は小乗の経典であり、程度の低い者を仏教に引き入れるための教えである、という考え方が全く支配的であった。それが大乗非仏説論によってひっくり返されたようになって、新しい阿含の研究が起こった、と思われるのであります。一方で、ヨーロッパに於けるパーリ語研究というものが、日本にもたらされた刺激ということも、

勿論ございますけれども。

そこで日本では必然的に、パーリ語のニカーヤと漢訳阿含経典との比較研究が起こって、当時また漢訳の経典には手が出なかったヨーロッパの学者を尻目に、目覚ましい業績をあげた訳であります。しかし、ひとまず漢訳阿含とパーリ阿含を比較研究して、その両方に共通する部分、それこそが仏陀自身の教えである、というようになったところで一安心したんだ、と宇井先生は書いていらっしゃる。そして、これこそが仏陀根本の説という風に一応考えられたのですけれど、もう批判的研究の方法が導入されております以上、そんなところで一安心では済まないので、さらにその方向に研究を押進めると、阿含の中にも新古の層があるではないか、阿含自体に歴史的な発展があって古いもの新しいものと見分けられるとするならば、古い部分こそがより純粋に仏陀の教えに近いのではないか。さらに、新しい部分はそれに比べれば、後代に附加された「夾雑物」を含んでいる、という風な考え方に進んで、阿含の分析的な研究が宇井先生等によって細かく進められることになるのであります。こうして、大乗経典よりも阿含経典、阿含経典の中でも古い層へ古い層へと遡れば遡るほど釈迦牟尼仏陀に近い、従って純粋な、仏教であって、時代が下がれば下がるほど、夾雑物をさしはさんで不純な——まあ、不純という言葉を使ってはありませんけれど、夾雑物という言葉は使われております——ものである。そういう考え方がかなり支配的であったように思います。

しかしやがてそれに対する反省も起こりました。このように歴史的過去に遡って純粋な仏教——根本仏教——を見つけようという努力が進められておる一方、そのように過去にさかのぼるだけが果して根本仏教を見出す道であろうか、という反省が、昭和十年前後に仏教学界をリードする学者方の中に生まれて来たように思います。そういう方向の先頭に立たれたのが、西の山口益博士、東の宮本正尊博士でありましょう。

宮本正尊博士は「根本仏教」という言葉を、「一番古い一番釈迦牟尼に近い原初の仏教」の意味でなく、別な意味に使われました。釈迦牟尼から始まってやがて大乗仏教、そして中国日本にまで及ぶ全仏教の拡がりの中に、一貫して

流れている、基本的な、仏教の「ものの考え方」――そういうものをこそ、根本仏教と呼ぶべきではないかという考えであります。そういう考えを宮本先生にサジェストしたのは、『根本中論偈』という龍樹の述作の表題であったらしいのです。『根本中と空』という著作もあります。

山口先生は、根本という言葉をそんな意味には使われませんでしたし、「根本中」という言葉を宮本先生が今言ったような意味に使っておられることには批判的でありました。『根本中論』というとき「根本」の語は「中」に掛っているのではない。「根本中の偈」ではなくて「中〔を説く〕根本〔論〕偈」の意味だ、ということをおっしゃったのを聞いたこともあます。しかし、宮本先生が「根本仏教」と言っておられたのと同様なことを山口先生も考えておられたと思います。私が学生時代、先生は「印度仏教中心思想史」という標題で講義をしておられました。「中心思想」というのは、宮本先生のいわゆる「根本仏教」であり、山口先生によればそれは縁起説でありました。東京の宇井先生も同じでありまして、宇井先生も縁起説を仏教の「中心思想」であると見定められておられたようであります。

過去へ過去へと歴史を遡ってその根源に純粋な仏教を見出そうという考えが、一転して、どの時代にも通じて底流として流れておる、仏教の基本的なものの考え方を、見出そうという方向へ進んだ、それが第二次大戦までの仏教学の一つの趨勢であったと思います。

阿毘達磨について一言だけ申しますと、阿毘達磨は、先程申したように過去へと遡って根本仏教を見出すという考え方に立てば、はなはだ釈迦牟尼の本意にはずれたものである。つまり、阿含が仏陀の時代を離れるに従って次第に不純になった。さらに、部派仏教に至って阿毘達磨の学問が起こると徒らに煩瑣哲学的になり、全く仏陀の本意を見失ってしまった、という風に考えられる。そこでは、阿毘達磨はただネガティブな評価を受けることになる。久しく続いたそういうネガティブな評価が見直されるようになったのは、戦後であると思います。今では、仏教の思想の歴史の中で、阿含の仏教がやがて大乗仏教を生み、大乗仏教の秀れた体系的な思想を生む、その媒介になったものとし

て、阿毘達磨はその意義を再び認められて来ているように思います。

阿毘達磨が再評価されるとき、その仏教思想史上に果した役割として認識さるべきは、和辻博士の言葉を借りますれば「仏教哲学の最初の展開」ということでありましょう。さすがに和辻先生、上手な言葉使いをされるもんだと感心いたします。阿含は釈迦牟尼仏陀の教えを伝えたものでありますけれども、その内容はけっして体系的な思想ではない。哲学とは呼べない。その阿含の教えから、初めて哲学と呼びうるようなものを展開させたのは阿毘達磨でありますから、まさしく仏教哲学の最初の展開である。これがあったからこそやがて第二の展開として中観の思想、第三の展開として瑜伽唯識の哲学が生まれるということになったのですから、その意味で阿毘達磨の思想的意義は大きい、という考え方は最近漸く広く容認されるようになったようであります。で、阿毘達磨研究が若い人の間にたいへん盛んになりました。この頃学会に参りますと、いつ行ってもたいてい阿毘達磨についての研究発表が四つや五つはあるのであります。そしてそういう発表をなさる方の多くは若手の学者方です。尤も少し意地悪く申せば、阿毘達磨の知識がまだ一般にそれほど深まっていないのをよいことにして、ほんの部分的な問題をとらえては気のきいたようなことを言って、それで研究発表とするというような点も無きにしもあらずであります。けれども阿毘達磨学が若い人々の間にこのように人気を得ようとは、私が三十歳位の頃には考えられなかったことであります。

――どうもとりとめのないことをしゃべって、始めにいかにも計画的に話すように言いながら頗る無秩序なことになり、お聞き苦しかったことと存じます。その上時間を超過してしまいまして申し訳ありません。本日、このような席を与えて下さいました皆さんの御好意に重ねてお礼を申しあげます。

（本稿は昭和六〇年四月一九日行われた櫻部教授還暦記念講義における筆録を先生に加筆して頂いたものである。）